様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１７日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０１５９

研究課題名（和文）　伝統演劇・地方劇・大衆文化と「日本」のシェイクスピア
—大和と沖縄を中心に—

研究課題名（英文）　“Japanese” Shakespeare as traditional, local and popular theatre

研究代表者
鈴木　雅恵（SUZUKI　MASAE）
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号:70268291

研究成果の概要（和文）：
本研究は、東アジアのシェイクスピア受容について英文で発信するためのプロジェクトの一環であり、「日本」のシェイクスピアの受容を、伝統演劇の典型としての能と、「日本」とほかのアジアの国々をつなぐ接点としての沖縄の芸能に広げているところに特徴がある。本プロジェクトの期間中には、シェイクスピアを本説とした泉紀子氏の「新作能・マクベス」の英訳や「新作能・オセロ」の研究、「琉球歌劇・真夏の夜の夢」の解読、新作組踊の調査や沖縄演劇の歴史に関する英文論文の執筆などを行った。

研究成果の概要（英文）：
This research is one part of the scheme to place the traditional, local and popular theatre into the map of the reception of Shakespeare in “Asia, “including “Japan”. The aim is to analyze the nature of the present “intercultural” Shakespeare productions seen in the global or local scenes. For this purpose, I have focused on the “Shinsaku Noh Shakespeare” project as one example of the traditional “high culture” trying to incorporate Shakespeare as one of the “Honzetsu” (source material) to create a new repertoire. Another focus was on Shakespeare themes included in the Okinawan theatre such as Ryukyuan Opera and Shinsaku Kumiodori as examples of the local and popular theatre created with the influence from other Asian countries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：シェイクスピア、比較演劇、新作能、大和と沖縄、アジアの伝統と西欧化、翻案、地方劇、劇団うない

１．研究開始当初の背景

（１）この研究は、アジアのシェイクスピア受容を、沖縄と大和との関係から本研究代表者が平成 14 年度から 15 年度まで、美学・比較文化の領域で、基盤研究（C）（２）　として助成を受けていたプロジェクト、「アジア

のシェイクスピア受容と上演　―沖縄と大和を出発点として―」をさらに発展させたものである。また、本研究代表者が、シェイクスピア受容の枠をはずし、沖縄在住の演劇評論家、与那覇晶子氏を研究分担者に迎え、平成18年度から19年度まで助成を受けたプロジェクト、基盤研究(C)「世界の中の沖縄演劇－女優の表象を中心として」（課題番号　1852028）とも関連している。大阪で人類館事件がおきた1906年という年が、沖縄で最初にシェイクスピア上演がおこなわれた年である、という、歴史的事実については、すでに別の拙論で指摘している（“Who are the Japanese Othellos?: Receptions and Productions of Shakespeare in Mainland Japan and Okinawa”邦題「日本のオセロは何人か」京都産業大学論集　人文系列第 31 号　pp.215-228 2004 年」）が、西欧文化の象徴としてシェイクスピアのアジアへの移入が、女優の誕生も含め、その国の演劇の近代化に果たした役割に関して、大和を通して近代化（西欧化）した沖縄のシェイクスピア受容が、韓国や台湾など、他の東アジアの国々の、日本を通じての、初期の西洋演劇受容を研究への足がかりにもなるはずである、という、仮定が背景にある。前述の二つのプロジェクトの過程で、代表者は、日本演劇学会大会において、「世界の中の沖縄演劇」（平成 16 年、パネリスト：鈴木雅恵・与那覇晶子・小菅かよ）、「シェイクスピアと異文化交流」（平成 17 年、パネリスト：鈴木雅恵・ダニエル・ガリモア・末松美知子・小林かおり）といったミニ・シンポジウムを提案し、問題提起をしてきた。

（２）「日本」のシェイクスピア上演の多様性が、西欧での国際学会で真剣にとりあげられるようになったのは、1991 年に東京で行われた第 6 回国際シェイクスピア学会に次いで、1996 年にロス・アンジェルスでおこなわれた第 6 回国際シェイクスピア学会大会において、故高橋康成氏を代表としておこなわれたセミナー　“Japanese Performances, Adaptations, Translations and Co-productions of Shakespeare”が、ほぼ最初であると思われるが、このセミナーで、代表者は野田秀樹の『三代目りちゃーど』と堤春恵の『正劇室鷲郎』について報告した。詳細は Eds. Minami Ryuta, Ian Carruthers and John Gillies, *Performing Shakespeare in Japan,* Cambridge University Press, 2001 を参照）。その後、ケンブリッジ大学における国際会議　“SCAENA”（2001）において”Intercultural Shakespeare”と題したセミナーがもうけられ、また、”Shakespeare Performance in the New Asias”（2002）と題した国際会議がシンガポールで行われたのは、前述の拙プロジェクト、「アジアのシェイクスピア受容と上演　―沖縄と大和を出発点として―」の報告書に記したとおりである。代表者はこうした国際学会やセミナーで毎回発表をおこなってきた。また、前述の「シェイクスピアと異文化交流」のメンバーと共に、平成 18 年 7 月のブリスベンでの第 8 回国際シェイクスピア学会のためのセミナー、“Brave Old Worlds: Shakespeare Production and Reception in East Asia”を企画して韓国、中国、台湾、マレーシア等の他の東アジア圏の研究者を募り、東アジアの研究者同士の連帯を固め、交流・議論をおこなってきた。

（３）こうして、「日本」を含む、東アジア諸国でのシェイクスピア受容と上演について、アジアから西欧への発信の場は増えつつあり、また、日本人研究者の間でも、「日本の演劇」の世界の中での位置を確認し、演劇史や世界演劇を再検討しよう、とする動きが見られるのだが、アジアの研究者同士、あるいは若手の「日本」の西欧演劇研究者の、「アジア」や「日本」の地方劇や伝統劇に対する認識が十分であるとはいえないことから、混乱が生じている面があるのが現状である。また、「日本」のシェイクスピア劇の中に、沖縄の近･現代の演劇を含めて論じることはまだほとんどなされていない。沖縄が「日本」の一地方であるという視点に立つにせよ、他のアジアの国々との交流の地点であるという視点に立つにせよ、「大和」と、「沖縄」、「アジア」と「西欧」の研究者同士の間に、隔たりが生じていることを代表者は危惧している。

２．研究の目的

（１）本研究と、日本の同世代のシェイクスピア研究者と代表者の研究上の違いは、代表者が他のアジア圏と「日本」との接点として、沖縄演劇を含む伝統演劇や地方劇に取り込まれたシェイクスピア劇にも着目している点にある。しかし、沖縄のシェイクスピア受容は、沖縄の演劇の歴史を抜きには論ずることはできない。従って、沖縄演劇と異文化交流の研究そのものが目的の一つである。

（２）同時に、代表者は能楽を、「日本」の伝統演劇の一つの要と考えている。そのため、羽衣国際大学の日本文化研究所の研究会に客員研究員として出席し、宝生流のレパートリーに入りつつある「能マクベス」の分析や英訳を試みながら、次の創作能としての「能オセロ」のプロジェクトに取り組んでいく。シェイクスピア劇の上演のために能的な要素を取り入れる演出（りゅーとぴあ能楽堂シリーズなど）、と、新作能の題材としてシェイクスピアを取り込むことの違いを明らかにすることも目的の一つである。

（３）　しかし、上記の研究を説得力のある

英語論文として世界に発信するためには、演劇研究の切り口となる西洋理論を学びなおした上で、アジア演劇の理論構築をする必要がある。そのため、現在ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校演劇学研究科のDavid Wiles氏の協力を仰ぎながら西欧圏の文化論や様々な研究者達のポストコロニアル理論を応用する方法を模索し、大和（「日本」）経由の沖縄のシェイクスピア受容の歴史を縦軸に、現代の様々な上演を横軸としながら、「文化商品」としてのシェイクスピアが、伝統演劇、地方劇、また、（映画やアニメ版シェイクスピアも含む）大衆文化に与えた意味について、焦点を当てた論文を書くことを大きな目的としている。

（４）最終目的は、大和および沖縄のシェイクスピア受容と上演を、韓国、台湾、香港などを含む東アジア全体の受容・上演史と結び付け、シェイクスピアという「文化商品」がいかに東アジア文化圏で加工され、新しい上演にどのような可能性があるか明らかにすることにある。

３．研究の方法

（１）歴史的な資料や上演データの収集(実演家や演出家へのインタビュー、映像の撮影やDVD編集などをふくむ)

（２）上演資料の分析と翻訳（映像の字幕翻訳の作成を含む）

専門家の知識を仰ぎながら、台本及び上演の分析と翻訳にあたり、映像記録に関しては、コンピュータ理工学部の学生をアルバイトとして雇用し、編集の補助にあたらせた。

（３）英語論文の作成。演劇理論と論文に関しては、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校芸術学部演劇学科大学院教授のデビッド・ワイルズ博士等の方針に従った。

４．研究成果

（１）グローブ座での取材を続けた上、David Wiles氏の指導の下、英文論文「Shakespeare as a Cultural Production in East Asian Theatre－with a particular reference to *A Midsummer Night's Dream* in mainland Japan and Okinawa－」の改定案をロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校に出し、Chapter II にあたる “The formation of Okinawan Theatre in its historical and sociopolitical context”を同校に提出した。

（２）Jonah Salz氏が編集中の、*A History of Japanese Theatre* (Cambridge University Press から 2014 年に出版予定)の中に収められるコラムとして、“Okinawan Theatre as the Boundary of ‘Japanese Theatre’” という論考を書き、受理された。

（３）羽衣国際大学日本文化研究所所長の泉紀子教授が主催する創作能の研究会に客員研究員として参加し、創作の過程はや各公演に立ち会いながら、FIRT(国際演劇学会)でのフィルム・セッションでのプレゼンを目標に、「新作能・マクベス」の詞章の口語訳・英訳対照表を作り、また、短縮版記録DVDへの英疑英語字幕を作成した。これは現在改訂版を作成中である。

（４）平成 22 年度に京都産業大学を会場に行われた比較文学会関西支部大会での黒澤明シンポジウムの司会とまとめ、平成２３年度に大阪大学で行われた国際演劇学会の実行委員として学会での司会・能舞台での通訳、同年度末に開かれた近現代演劇研究会特別集会：国際アジア演劇シンポジウム「伝統と近代」においての、簡秀珍博士の発表「日本植民地下の台湾の児童劇」）の司会及び、香港のギルバート・ファン博士の発表（「両足で歩く：香港演劇界のエコロジー」）の代表質問者役、平成 24 年に立命館大学でおこなわれた比較文学会関西支部大会における、瀬戸宏氏の中国のシェイクスピア受容に関する研究発表の司会などを通じ、本研究の発展ともつながるように人脈を広げ、また、島根県の「とりの演劇祭」にて韓国の演出家に取材し、東アジア圏のシェイクスピア受容の資料収集につとめた。

（５）芥川賞作家・大城立裕氏の新作組踊（「今帰仁落城」、「花の幻」、坂東玉三郎主演の「聞得大君誕生」など、沖縄演劇関係の取材・資料収集を進め)、また、沖縄の演劇評論家・与那覇晶子氏とともに、国立劇場おきなわの芸術監督・幸喜良秀氏へのインタビューをおこなった上、沖縄県立美術館にておこなわれた、シンポジウム「劇場と社会」、早稲田大学で行なわれた復帰４０年沖縄国際シンポジウムなどにと共にパネリストとして参加し、新作能との比較研究の観点から新作組踊に関する議論を進めた。

（６）乙姫劇団の元団員を中心に結成され、乙姫時代のレパートリーを受け継ぐ劇団「うない」の取材をし、また、宮古島在住の沖縄芝居研究家大嶺（小菅）の協力を得て、故間好子氏（乙姫劇団の二代目団長）劇から提供された 1960 年の「琉球歌劇・真夏の夜の夢」の解読を行った（現在、英訳中)。

以上、シェイクスピア劇の受容を能から沖縄芝居まで扱った研究は他に例がないこともあり、今後も国内外に発表し続けていく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① Masae Suzuki “The Representation of Women in Okinawan Theatre: From Shakespeare to Shinsaku-kumiodori”
「復帰 40 年沖縄国際シンポジウム論集」(仮題、早稲田大学)に掲載決定, 査読有、2013 年
② 鈴木雅恵「シェイクスピア・能・組踊 ー『マクベス』と『オセロ』の翻案舞台化を中心に」与那覇晶子編「組踊の系譜」ー朝薫の五番から沖縄芝居、そして「人類館」へー シンポジウム「組踊の系譜」・「劇場と社会」（彩優印刷）に掲載 pp.54-64 査読なし、2012 年
③ 鈴木雅恵「雅萍(Ya-ping Chen)『解放と統制：初期台湾モダンダンスにおける植民地的近代と女性の舞踊身体』について」
『西洋比較演劇研究』10 号、査読有、2011, 142-143

〔学会発表〕（計６件）
① Masae Suzuki “The Representation of Women in Okinawan Theatre: From Shakespeare to Shinsaku-kumiodori”（復帰４０年沖縄国際シンポジウム 於・早稲田大学小野講堂 平成２４年３月３０日）
② 鈴木雅恵 シンポジウム・演劇と社会「シェイクスピア・能・組踊ー「オセロ」「マクベス」の翻案舞台化を中心にー」
（平成２４年３月１１日、於・沖縄県立美術館にて）
③ Masae Suzuki and Noriko Izumi *Shinsaku Noh Macbeth* : Tradition and Innovation (Transformation) in Noh Shakespeare” (平成 23 年 8 月 11 日 於・大阪大学 国際演劇学会大会にて）
④ Masae Suzuki
A proposal to the Asian Theatre Working Group: How can Noh/Kyogen contribute to Shakespeare productions, and how can Shakespeare contribute to indigenous theatre in Asia?
（平成２２年７月２５日、 於・ドイツ ミュンヘン大学 国際演劇学会大会にて）
⑤ 鈴木雅恵「Ya-ping Chen『解放と統制』について」
（平成 22 年 5 月 29 日、西洋比較演劇研究会例会 於・成城大学）
⑥ 鈴木雅恵「沖縄における『夏の夜の夢の受容と上演」
（平成２２年４月１７日、於・甲南大学）

〔図書〕（計１件）
① Lingui Yang (Ed) , Douglas A. Brooks, Ashley Brinkman, Glyn Parry, David Bevington, Richard Burt, Andrew Shoenbaum, Xianqiang Meng, Weimin Li, Alex. Huang, Bi-qi Beatrice Lei, Chin-jung Chiu, Alan Ying-nan Lin, Michael J. Collins, Timothy Billings, Chong Zhang, Yimin Luo, Masae Suzuki, Roger Strittmatter, Lynne Kositsky, David Richman, John Jowett Abdulla Al-Dabbagh, Marina Tarlinskaja Edwin Mellen Press: New York, ***Shakespeare Yearbook Vo.17, Shakespeare and Asia,*** 2010 321-336

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木雅恵（SUZUKI MASAE）
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：70268291